

摂食障害者の内的世界

—TAT図版19における「守り」という観点から—

藤 本 麻 起 子

I 問題と目的

摂食障害 (Eating Disorder) とはDSM-IVによると、神経性無食欲症 (Anorexia Nervosa; 以下「拒食症」と記す)、神経性大食症 (Bulimia Nervosa; 以下「過食症」と記す)、特定不能の摂食障害 (Eating Disorder Not Otherwise Specified) に大別される症候群である。簡単に述べると、拒食症は過度の食事制限による体重減少と月経の欠如、過食症は空腹であるかどうかにかかわらず過剰に摂食し、自発的に嘔吐するという、身体面・行動面の特徴があるのに加え、拒食症も過食症も、体重が増えることに対する恐怖、自己評価が体重や体型に過剰に影響されるという心理的特徴があるとされている。

摂食障害に関する主な研究は、日本では1960年代にはじまり、以後摂食障害者の増加と共に、多数の研究がなされてきた。中でも臨床心理学の分野では、先に述べた「体重が増えることに対する恐怖」、「自己評価が体重や体型に過剰に影響される」という摂食障害の特徴を、「なぜ体重が増えることが脅威なのか」、「なぜ体重、体型が自己評価に大きく影響を与えるのか」といった視点から考えるというように、摂食障害者にみられる特徴の背景にどのような心性があるのかということに着目してきた。そしてその手がかりとして、食行動評価、身体像や性格を検討する質問紙法や投影法、心理療法における摂食障害者の語りなどが使われてきた。このように方法は様々であるが、摂食障害者の心性を考えるにあたって、臨床心理学では行動やことばなど、摂食障害者自身が表現したものから考える、という点を基本としていると言えよう。

ある人が表現するものから心性を考える、というアプローチの方法の1つとして、TAT (Thematic Apperception Test, 以下TATと略す) がある。TATは“現実のコピー” (安香, 1992) といわれる図版に描かれた絵を見て、物語をつくってもらうテストである。TATでは語り方や語られるテーマから、その人のパーソナリティや抱えている問題が推察できるとされている。さらに、提示された図版がどのような状況であり、その状況がどのように展開していくか、という語りの中に、語り手が世界をどのようにとらえ、その世界を生きているかといった、語り手の在り方を推測することができるとも考えられることから、語り手の内的世界を理解する手がかりとして優れた方法であると言えよう。そこで、藤本 (2002) ではTATを手がかりとして、摂食障害者の内的世界について検討した。本論文ではそのうちの図版19に絞って検討をすすめることとする。

ところでTATはある図版から浮かんだ仮説を、他の図版から浮かんだ仮説と絡めてパーソナリティを描く、という側面をもつテストであるため、図版を絞ることで考察の幅も限られてしまう

ことは否めない。しかし1枚の図版に対する語りであっても、そこから読み取れることは多数ある。また、図版の特性を生かして観点を絞ることは、図版によって検討されるポイントがある程度定まっているTATを生かす一方法ではないかと考えられる。そこで本論文でも図版を絞って検討を進めることにするが、中でも図版19を選択した理由を、図版19の特徴とその意義に触れつつ、以下に述べる。

図版19は坪内（1984）によると、“中央の部屋、船のようなもの”からなる“主要部分”，“雪の窓、黒い形のもの、フクロウのようなもの”からなる“小部分”，“窓の中のもの、水・波・雪、雲、煙突”などの“特異部分”からなり，“TATの中では最も抽象的な絵”である。曖昧な図版19に対して“絵のイメージを自分なりに素早く捉え、崩れのない物語を語りだせる”かどうか、現実生活に適応していく力をみることができるとされている。つまり図版19に対する語りには、曖昧な状況におかれた際に自らを構成していく力を推測することができると考えられる。

また図版19は“基底気分”が反映されやすいものであり、特に“本来その人の持っている危機感が、ひとつの気分として表現される”ことの多い図版であると坪内（1984）は言う。鈴木（1997）によると，“外界”，つまり坪内（1984）の言う“黒い形のもの、フクロウのようなもの、水・波・雪、雲、煙突”（以下まとめて「外界」と記す）がしばしば危機状況と認知されやすく、それと対比され，“自分を守ってくれるもののイメージ”にとらえられやすい“家あるいは船”，すなわち坪内（1984）の言う“中央の部屋、船のようなもの”（以下「家、船のようなもの」と記す）がどのような状態にあるのか、というところに図版19の着眼点があるという。このことから、図版19は語り手の根底の情緒、特に根底に抱く危機感がどのようなものであるかを推測するのに優れた図版であり、特に「外界」が危機にあると認知された場合、その外界と「家、船のようなもの」との関係性には、危機に対する、言わばその人の「守り」の在り方が推測されると言えるだろう。さらに語りを追うことで、抱かれている危機感をその人がどのように対処しようとしているかを検討することもできると考えられる。また図版19に対する語りや姿勢そのものにも、危機に対するその人の在り方、「守り」を推測することができるだろう。

つまり図版19は曖昧な状況に投げ出された時に自らを立て直していく力や、危機に対してどのような在り方をしているのかという、「守り」について検討するのに優れた図版であり、かつ危機感の程度や質について推測することもできる図版であると考えられる。

では「守り」の在り方から摂食障害者の心性を考えるということには、どのような意義があるだろうか。危機における守り，ということに近いテーマの研究と考えられるものに、徳田（1981）がある。徳田は、摂食障害者の描いた家屋画では、垣根など、家を守るものが破壊されているが、家そのものは守られているという結果から、摂食障害者は身体を傷つけることで自分を守っている、と考察している。他にも李（1989）はWinnicottの“偽りの自己”と“本当の自己”という概念を用い、摂食障害にもみられるような自己破壊行動には“偽りの自己を生きて本当の自己を潰す”代わりに、摂食障害などの自己破壊的な行為をすることで“反社会性”を選び、“本当の自己への希求を示す”と考察している。これらの研究からは、拒食や過食によって自己の身体にネガティブな影響が出るという摂食障害の症状をもつことに、自分を守るという一面があるということが論じられていると考えられる。

確かに臨床の場でも、拒食症のクライアントは、極端に体重が減少して生体活動が低下して生

命を脅かす恐れがあり、食べたいという気持ちがあることが往々としてありながらも一貫して食を拒み続けるところに、拒食が守りとなっているのではないかと思われることがある。また過食症のクライアントも、過食嘔吐の行為に罪悪感を抱きつつも、過食嘔吐行為を大切なものとしてやめられないと語ることが多く、症状をもつことがその人の守りになっている可能性がうかがわれることがある。しかしながら、では拒食・過食という症状を出して守らなければならないような心的状況とはどのようなものであり、守ろうとしている「自分」とはどのようなものなのだろうか、という疑問も浮かび、この点についての検討の余地があると考えられる。

そこで本論文では、危機状況における在り方が語られやすい図版19への語りを「守り」という観点から検討することで、摂食障害者の基底気分、特に危機感がどのようなものであるか、危機に対する守りの在り方はいかなるもので、守ろうとしているのはどのようなものなのか、ということについて検討し、摂食障害者が症状を抱えながら生きる様を理解する一端としたい。

Ⅱ 方 法

(1) 調査協力者

調査協力者（TATを使った調査ということから、以下、「語り手」と表記する）は病院の内科あるいは精神科を受診しており、DSM-IVに基づいて摂食障害の診断を受けている患者30名（すべて女性。入院患者6名、外来患者24名。平均22.6歳，SD4.94）。調査時の主な症状は拒食が14名、過食嘔吐が16名であった。なお比較検討のため、統制群を設けた。統制群も30名で全て女性、年齢の平均は21.2歳，SDは3.99であった。

(2) 調査用具

Harvard版TAT（図版19を含む）、記録用に筆記用具、反応時間計測用に秒針付時計を用いた。

(3) 手続き

調査は全て個別面接法で行った。「これから絵を1枚ずつお渡ししますので、それを見て物語をつくってください。絵がどんな場面をあらわしているか、場面の中の人はどんなことを考え感じているかを自由に想像し、今現在のことに加え、これまでにどんなことがあってこのようになっているのか、これからどうなっていくのかなども入れて、1つの簡単なお話をつくってください。正しい物語や間違った物語、というものはありません」と教示して、図版を渡した。語り手が図版を受け取ってから発言するまでの時間と、最初の発言から終わりまでにかかった時間を計測し、語りを筆記記録した。また口調、語り手の表情や様子も語り手の表現と考え、調査中あるいは調査後に記した。

なお、“摂食障害群”というように、摂食障害を抱えている、という共通性でもって群で検討することには、摂食障害を抱えた人が個別的であることや、摂食障害自体ではなくその人自身について考える、という側面を損なうおそれが考えられる。しかし群で検討することで、摂食障害の奥に潜む本質的なテーマを考えたり、統制群と比較することで浮き彫りになることもあったりするであろう。そこで、群で検討することの弊害を自覚しつつ、群で検討するとはいえ、“摂食障害だから”ある特質がある、という見方に陥らないよう留意しながら検討していきたい。

Ⅲ 結果と考察

(1) 結果の整理

まず結果を整理するにあたり、「守り」を検討するための着眼点を挙げた。その際、鈴木(1997)の着眼点を参照し、分類の根拠とした。この研究は、TATというテストでどのような反応がみられるものなのか、そしてその反応から考えられる語り手の心性はどのようなものか、ということについて概観したものである。語り手の危機状況や「守り」を考えるにあたり、図版19ではそもそもどのような危機状況や、その危機状況への対処が語られやすいものかを抑えておくことで、結果の整理の足がかりとなると考えられたからである。

またTATでは形式的側面と内容的側面の両方をみていくことが必要とされていることから、物語の筋、絵の細部と認知といった、TATの形式的側面・内容的側面両方に関して述べた安香(1992)の着眼点も参照し、臨床群30、統制群30の語りを分類した。以下、着眼点の作成と分類について述べる。結果のまとめについては、表1を参照されたい。

まず、図版19は危機状況が語られやすいといっても、語られない反応もみられるという鈴木(1997)の見解から、「危機についての語りの有無」を着眼点①とした。ここでいう「危機」とは語りの中の“自然の脅威や魔物の襲来”(鈴木, 1997)などを指す。例えば“こびとの家で、外はすごい雪のふぶきで嵐”(統制群語り26)は“嵐、雪のふぶき”という“自然の脅威”が語られていると考えられ、「危機が語られている」に分類した。このように分類していった結果、1「危機が語られている」と考えられたのは臨床群で23名、統制群で22名、2「危機が語られていない」のは臨床群で7名、統制群で8名であった。

まず、全体の大多数を占めた「危機が語られている」ものについての「守り」を検討することにした。そこで大きく「守られている／守られていない」ということをみる、「危機が語られている中で守りについて」を着眼点②とした。鈴木(1997)は図版で“家あるいは船”と認知されやすいものを、“自分を守ってくれるもののイメージ”とし、“家あるいは船”^(注1)が“外界”^(注2)と対立的に述べられものと、“家あるいは船”^(注1)と“外界”^(注2)が一体化している場合の二通りに分けて考えている。そこで「家・船のようなもの」の言及について着眼点③を作成し、「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」を③-1とした。外界の「脅威」から完全に守られて、明るく楽しく生活しているのか…それとも実際に被害を受けるのか”(鈴木, 1997)ということが守られているかどうかのポイントとなっていると考えられることから、“明るく楽しく生活している”場合をa「守られている」、 “実際に被害を受ける”場合をb「守られていない」の一例として分類していった。

また鈴木(1997)のいう“家あるいは船”と“外界”が一体化している場合については該当するものがなかった。③-1以外は「家・船のようなもの」の言及がなく、「外界」の危機状況に直接人などが身をおいている形式と考えられた。そこでこれを③-2「『家・船のようなもの』の言及がない」とした。そしてその状況が変わらないか、より深刻になる場合などをb「守られていない」、危機状況の中で登場人物が救われるといった場合をa「守られている」と判断した。分類の内容と実際の分類については、以下に例を挙げて述べることにする。

まず③-1「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」中でa「守られている」と考えられたものとして、先に述べた統制群語り26を挙げる。ここでは“こびとの家で、外はすごい雪のふぶきで嵐”という脅威が語られるが、“こびとの家は地にしっかり根付いて…こびとは家の中で落ちついている”と続いた。この語りは、安定した“家”によって“こびと”が“ふぶき”から守られていると考えられ、a「守られている」ものに分類した。ここに分類されたのは臨床群で8名、統制群で15名であった。

同じく③-1「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」場合でb「守られていない」例としては、臨床群語り2があった。“荒れた海の中に、船、が、あって、ここは幽霊が出るっていう噂があって…船は遭難する。それ（幽霊）のせいだ”という語りは、荒れて幽霊が出る海に在るという危機状況において、遭難というさらなる危機状況に陥ったと考えられ、b「守られていない」と判断した。このように判断されたのは臨床群8名、統制群5名であった。

③-1に該当するが、守りについて判断ができないと考えられたものが臨床群に1つあった。臨床群語り11は“北極圏に近いところで天気が悪くて、おどろおどろしくて”という危機的な状況にある“潜水艦”が対立的に設定されているが、“潜水艦”の中の人“北極で命を落とすかもしれないけど、それより使命に燃えてる”という語りで終わっており、危機的な状況に対してどうなったかについて述べていないと考えられたため、c「その他」に分類した。

次に③-2「『家・船のようなもの』の言及がない」ものについて述べる。まず、a「守られている」と考えられたのは臨床群では1名、統制群では2名であった。例として統制群語り7を挙げる。語り7は図版全体を“闇の世界”にとらえ、“うさぎ”が“闇の世界を支配している魔王”に“捕まらないようにして逃げて”いる場面としており、“うさぎ”を守る「家・船のようなもの」は語られていないと考えられた。その後は“うさぎは何とか魔王の手から逃げ延びて、現実の世界に戻ってくることができます”というものであった。うさぎが魔王に追われる、という危機状況から“逃げ延び”てうさぎが助かるという流れ自体に危機状況からの守りがあると考えられ、a「守られている」に分類した。

同じく③-2「『家・船のようなもの』の言及がない」場合においてb「守られていない」と考えられた一例として、臨床群語り12を挙げる。“得体の知れないものにしか見えなくて、はっきりしたものには見えないんですけど。なんか不気味な雰囲気、漂っている感じ”という語り12では、図版全体を“不気味な雰囲気”にとらえており、その印象のままで語りを終えている。語り手自身が図版に向かうことで覚えた不気味さの中にとどまっている、と考えられた点で「守られていない」と判断した。この分類に該当するものは統制群にはみられず、臨床群にのみ5名あると考えられた。

着眼点②「危機が語られている中での守りについて」まとめると、a「守られている」と考えられたものは臨床群で9名、統制群で17名、b「守られていない」と考えられたものが臨床群で13名、統制群で5名、c「その他」が臨床群にのみ1名であった。

(2) 検定結果の考察

(1) の分類をもとに、臨床群と統制群で項目ごとに分類数を χ^2 検定もしくはFisherの直接確率検定を行った。その結果を表1に示す。

まず、着眼点①「危機についての語りの有無について」、1「危機が語られている」のは臨床

表1 図版19への語りの分類と検定結果

分類の着眼点	分類の下位項目	臨床群該当数	統制群該当数	χ^2 値あるいはp値 ^{注1)}
着眼点①：危機についての語りの有無について	1：危機が語られている	23	22	$\chi^2=0.089$
	2：危機が語られていない	7	8	$\chi^2=0.089$
着眼点②：危機が語られている中での守りについて	1：守られている	9	17	$\chi^2=6.017^{**}$
	2：守られていない	13	5	$\chi^2=5.079^*$
	3：その他	1	0	p=0.313
着眼点③：「家・船のようなもの」の言及について	1：「家・船のようなもの」が「外界」と対立的に述べられている			
	a 守られている	8	15	$\chi^2=3.455^+$
	b 守られていない	8	5	$\chi^2=0.884$
	c その他	1	0	p=0.313
	2：「家・船のようなもの」の言及がない			
	a 守られている	1	2	p=0.554
着眼点④：「家・船のようなもの」の内部の言及について	1：言及がある	7	15	$\chi^2=4.539^*$
	2：言及がない	23	15	$\chi^2=4.539^*$

注1) +p<.10, *p<.05, **p<.01,

群23名，統制群22名であり， χ^2 検定の結果，有意差はみられなかった（ $\chi^2=0.089$ ；n.s.）。危機状況が語られやすい図版19において，どちらかの群がより図版19を危機的にとらえるということとはなかったと考えられる。

また着眼点②「危機が語られている中での守りについて」考えると，1「守られている」と考えられたのは臨床群で9名，統制群で17名であり， χ^2 検定の結果，有意に統制群の方が「守られている」と考えられた語りが多かった（ $\chi^2=6.017$, p<.01）。統制群の方が「守られている」語りが多かったという結果から，臨床群は統制群と比較して守りが薄いのではないかと推察される。

1「守られている」もののうち，③-1「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」でa「守られている」と考えられたのは臨床群で8名，統制群で15名であり， χ^2 検定によると，有意に統制群にこのような語りが多い傾向がみられた（ $\chi^2=3.455$, p<.10）。また③-2「『家・船のようなもの』の言及がない」では臨床群が1名，統制群が2名であり，Fisherの直接確率検定の結果，有意差はみられなかった（p=0.554；n.s.）。つまり臨床群は「守られている」と考えられた語りが統制群より少ないが，特に③-1「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」場合において，より守りが薄いと考えられる。このことについて，統制群語り19を例に挙げて考察する。

統制群語り19では“海の上の船”が“嵐に遭っていて”“悪魔のようなものが襲いかかっている”という状況が“一晩中続く”という危機にある。しかし“船はなんとかもちこたえて，朝は

静かになる”と続く。嵐や悪魔に襲われる状況において“船”がもちこたえる、というところに、危機状況を切り抜ける語り手の守りの強さが推測される。

ところで「家・船のようなもの」は、その内部を外界から隔てるものであり、“自分を守ってくれるもののイメージ”（鈴木，1997）であると考えられる。臨床群が危機状況と「家・船のようなもの」とを対立させたときに、統制群語り19のような「守られている」語りが少なかったということは、臨床群では、「家・船のようなもの」に象徴される、外部から内部を隔てる守りのようなものをもっている、その守りとしての機能は薄いのではないかと推測される。

②-2「守られていない」については臨床群で13名、統制群で5名であり、 χ^2 検定の結果、有意に臨床群の方に「守られていない」と考えられた語りが多かった（ $\chi^2=5.079, p<.05$ ）。この結果から、統制群と比較した場合の、臨床群の守りの薄さが推測される。「守られていない」もののうち、③-1「『家・船のようなもの』が『外界』と対立的に述べられている」場合でb「守られていない」と考えられたのは臨床群で8名、統制群で5名であり、 χ^2 検定によると、有意差はみられなかった（ $\chi^2=0.884; n.s.$ ）。また③-2「『家・船のようなもの』の言及がない」場合でb「守られていない」と考えられたものは、臨床群には5名みられたが統制群ではみられなかった。Fisherの直接確率検定の結果、有意に臨床群の語りに「『家・船のようなもの』の言及がない」において「守られていない」と考えられたものが多くみられた（ $p=0.02$ ）。

これらのことから、臨床群は「守られていない」と考えられる語が多いが、特に「『家・船のようなもの』の言及がない」場合に「守られていない」と考えられるものが多かったと言える。では「『家・船のようなもの』の言及がない」に「守られていない」と考えられたものについて、例を挙げて考察してみよう。

臨床群語り手24は“ここは平和なところやって…悪魔みたいな、なんか悪いのが襲ってきて…ボロボロにしてる途中で…もう荒れ果てたところになってしまった”と語っている。図版全体をかつて“平和なところ”であったが“悪いのが襲って”きているという危機状況を語っている。そしてその世界は“荒れ果てたところになってしまった”と、危機に対して守られることなく、深刻で絶望的な心性にあることがうかがわれる。

「『家・船のようなもの』の言及がない」では、“自分を守ってくれるもののイメージ”（鈴木，1992）として語られやすく、また坪内（1984）によると、ほとんどの語り手が認知するという「家・船のようなもの」が語られていない。「家・船のようなもの」について語らず、図版全体を危機状況とみる中で「守られない」という語りには、臨床群語り24にみられたように、語り手の心性における危機状況の深さ、そして守りとしての「家・船のようなもの」というイメージが希薄で、危機状況にさらされているというような、深刻なところが臨床群により多くみられるのではないかと推測される。

以上の統計検定結果と考察から、臨床群は危機状況にあって自らを守るもののイメージが希薄、あるいは守るもののイメージはあっても、その守りの機能は薄いのではないかと推測された、とまとめられる。“I問題と目的”で述べた徳田（1981）や李（1989）の研究で、摂食障害者は身体を傷つけるような摂食障害という症状をもつことで自分を守っている、と考察されていたことと、本研究の結果を考え合わせると、摂食障害者は守りが薄いゆえに、症状というかたちでの守りを呈しているのではないかと推測される。あるいは、症状を「守り」と考えるなら

ば、摂食障害の症状によって自らを守ろうとしていながらも、「守り」の機能が実感され難いということも考えられよう。ここに、症状を出すことで守られない苦しみがあるのではないかと推測される。

では、守りの実感が薄い摂食障害者の内的世界とはいかなるものなのだろうか。摂食障害者が守ろうとしているものとは何だろうか。そして「守り」はどのような在り様なのだろうか。次の章では、こういった「守り」の側面について検討していくこととする。

(3) 「守り」についての質的側面について

ここではいくつかの例をもとに、摂食障害者の「守り」について、さらに考察していく。

まずは守りの実感が薄いと考えられた摂食障害者の内的世界がいかなるものかについて考えてみることにする。摂食障害群の語り手3は、“すごくさみしいところで…ずっとここは寒いまま、冬のまま”と語った。坪内(1984)によると図版の白い部分が雪と認知されやすいことから、冬の場面ととらえられること自体は珍しくないが、ここでは図版の細部に触れず、図版全体を“寒い”“冬”としていることから、語り手の内界は“冬”に象徴される冷たさや厳しさなどが感じられるような世界ではないかと推測される。また、春や暖かさについての言及がなく“ずっと寒いまま、冬のまま”としていることや、“さみしいところ”というところから、深い孤独感や守りのなさが感じられているのではないかと考えられる。(2)であげた語り24も、図版全体を“ボロボロ”と表現するなど、守りの実感が薄い摂食障害者の内的世界は、相当深刻に傷つけられていることがあるということが推測される。

次に、摂食障害者の守りの在り様について検討する。図版19はTATの中で最も曖昧な図版であり、それゆえ最も構成員が求められると考えられている。そこで、“あいまい状況に投げ出されたとき、機敏に状況判断して行動できる”“バイタリティが脆弱な場合”、“絵”といった形で“反応を拒否したりする”という、特殊な反応形態が指摘されている(坪内, 1984)。鈴木(1997)は“絵”と反応するもののうち“具体的な事物を認めて”いないもののみを“問題視”している。本研究では、図版に対し“絵”と反応し、かつ“具体的な事物を認めて”いないと考えられたものが臨床群にのみ2例、臨床群語り25と語り30にみられた。数は少ないが、特殊な反応ということでこの2例について検討する。

まず語り30は“小学生の男の子が…課題の絵をかきましようっていう感じで描い”たとし、“絵”そのものについての具体的な言及はなかった。語り30は危機感や否定的な感情についての言及もなく、①-1「危機が語られていない」ものに分類された。語り手が図版に向き合うことで全く危機感を感じなかった可能性もあるが、この図版が語り手の危機感を喚起しやすいという性質があることを考えると、語り手30が危機感を感じつつも言及せず、“絵”として細部に触れないことで、喚起された危機感を切り離したのではないかとすることも考えられよう。対して語り25では、語り30同様、“子どもが描いた絵”としつつも、“何かに不安を感じて、描いた絵”と述べている。“絵”ということで危機感を切ろうとしたが、感じられた“不安”が大きいあまり“不安を感じて、描いた絵”と語ったということも考えられよう。語り30と語り25で守られ方は異なるが、この2例から、摂食障害者には、感じている危機感を「切る」ことで対処する、という守りの在り様が考えられる。不安を切る、という心理力動として「解離」があることから、「解離」が摂食障害者の守りの在り様の1つであることが示唆されよう。盛岡(2001)は、過食行

動が解離とある程度関連していることを質問紙によって実証し、本研究の語り手25と30は過食症を呈する方々だったことから、過食には抱えきれない危機感や不安を切り離して、自らを守ろうとする意味があるのかもしれないと推測される。

また、危機感を切ろうという守りがみられた図版19への語り手25と30からは、摂食障害者が「守ろうとしているもの」の1つのかたちとして、語り手自身が基底に抱えている危機感における「自分」というものが考えられよう。そこで、摂食障害者が「守ろうとしているもの」についてさらに検討していくこととするが、今度は統制群において②-2「守られている」と考えられた語りを手がかりに「守られている」状態について検討し、そこから逆に「守られていない」状態において「守ろうとしているもの」について考えてみる。

「家・船のようなもの」が“自分を守ってくれるもののイメージ”（鈴木、1992）、つまり「守り」のイメージを抱かせるものであると考えると、「家・船のようなもの」の内部は「守られている」あるいは「守られていない」ものや状態、そして「守ろうとしている」ものや状態が投影されるのではないかと考えられる。つまり、「守り」としての「家・船のようなもの」が語られ、そのうえその内部にまで言及がある場合には、「守ろうとしている」ものや状態が語り手により抱かれている、と考えることもできるだろう。特に外界があり、外界の中にあって同時に内部を持ちうる「家・船のようなもの」は身体や外界における自己をイメージさせるものであるとも考えられ、「家・船のようなもの」の内部は身体の内側、自己の核とでもいえるものとみなすことも可能であろう。

そこで、「家・船のようなもの」の内部についての言及があるかどうかを着眼点④として検討してみると、統制群で15名、臨床群で7名が「家・船のようなもの」の内部について言及しており、 χ^2 検定の結果、有意に統制群の方が多かった（ $\chi^2=4.539, p<.05$ ）。統制群の方が「守られている」語りが多かったことを考えると、守られているという感覚があることで、自己の内部、つまり自身の核のようなものを持ちえるのではないかと推測される。例えば（2）でもとりあげた統制群語り26では、“外はすごい雪のふぶきで嵐”だが、家は“地にしっかり根付いて”いて、危機状況の中でも守られていると考えられた。さらに語り手26は“中はこびとたちが蓄えた食糧とか明かりをともして…のんびり、ゆっくりしている…家の中では落ち着いている”と、家の内部についても語っている。ここでは、嵐の外界に対してしっかりと根付いた“家”は自分を守ってくれるものとイメージされ、語り手26は守られているという感覚があると考えられ、家の内部は“食料”や“明かり”があり“落ち着いている”というように、さらに危機に対する備え、危機に対しても揺るがないほどの自己への安心感や信頼感があると推測される。

また「家・船のようなもの」の内部についての言及があるかどうかについての χ^2 検定の結果を臨床群からみると、臨床群の方が「家・船のようなもの」の内部についての言及が有意に少なかった、とも言える。臨床群の方が「家・船のようなもの」を守りの機能を果たすものとしてとらえることがより少なかったことを考えると、外界と内部を隔てる「家・船のようなもの」の守りが薄いことが関連して、「家・船のようなもの」の内部がある、という感覚がもちがたかったのではないかと推測される。摂食障害群は、「守られていない」という感覚によって、守られなさと共に「内部のなさ」をも感じるということがあるのではないかと考えられる。摂食障害群では、例えば統制群語り26にみられたような自己への安心感、信頼感というもののや、

内部という、自身の核のようなものをもちがたい、ということが推測されよう。摂食障害者には、守るべき内部というものが漠然としている可能性、あるいは内部という自身の核のようなものをもちがたいがゆえに、これを守ろうとしているという可能性が考えられる。

IV 終わりに

本論文では、摂食障害者の図版19への語りを「守り」の観点から考察した。その結果、摂食障害群は、守り自体のイメージ、あるいは守りの機能がより希薄ではないかと考えられた。ここに、先行研究でも指摘されている、症状によって守ろうとしているということが考えられると共に、摂食障害群の生き難さが推測される。そこで、「守り」の薄さに配慮しつつ、心理療法の守られた空間と関係性の中で、「守り」を育てていくことが1つの目標となり得ると考えられる。

さらに本研究では、守りが薄い摂食障害者の内的世界は、深刻に傷つけられている場合があることが考えられた。摂食障害者の守りの在り方については、不安を切り離す、というものが考えられ、これは「解離」や過食行為と関連する可能性が推測された。さらに守ろうとしているものとして、不安の中にある自己、自身の核のようなものが考えられたが、そもそも守るべきものが摂食障害者には漠然としている可能性が推測された。

ここで、守るべき内部というものが漠然としている、あるいはもちえていない場合と、内部はありながらも守りが薄くて損なわれつつある、という場合では、そもそも内部に象徴されるような自分自身の核、または核となっていく素地の強さが異なると考えられ、守りを育てるという治療方針も異なってくるだろう。近年摂食障害の病態は広がり、下坂（1999）によると“摂食障害には準正常から神経症、境界例を通して精神病レベルにいたる”まで、いろいろな病態水準が考えられるという。「守り」と病態水準についての検討が必要ではあるが、病態水準に加え、「守り」のレベルや質についてみていくことも、個々の摂食障害者の抱えている問題や状態、治療の展望について考えるための1つの視点となり得るのではないかと。

「守り」の個別面について触れておくと、「守り」には、自然という守り、社会という守り、人間関係の中の守りなど、その人を取り巻く様々な「守り」があり、さらにそれらに守られた体験が内在化してその人の中の「守り」となっていくと考えられよう。その意味で「守り」にはその人が生きてきた世界や歴史を反映する個別的なもので、そのとき問題となっていることと深く関連することであるとも言えるだろう。そこで、「守り」の程度をみるだけでなく、その「守り」がどのように形成されてきたのか、あるいはこれまでの過程で、ある「守り」が失われたということがあるか、その「守り」とはいかなるものか、また「守り」でもってその人が生きてきた様などをきいていくことも重要な側面であると考えられる。

本研究はTAT図版19に対する語りのみを手がかりとし、また考察で詳細に扱えたものも数例のため、考察されたことが全ての摂食障害者に言えることではないということはもちろん、本研究から導かれた仮説にすぎない。今後は他の図版への語りの検討を深めて本研究の考察や先行研究とつなげ、摂食障害者の心性理解に近づいていきたい。

注1) “I問題と目的”でも触れたように、鈴木(1997)のいう“家あるいは船”は本研究では「家・船のようなもの」であり、また本研究では“外界”(鈴木, 1997)を「外界」と記している。

文 献

- 安香 宏(1992): TATの分析・解釈技法をめぐって 安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄(編)
臨床心理学体系第6巻 人格の理解② 金子書房 pp54 - 88.
- 藤本麻起子(2002): 摂食障害者の関係性 京都大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)・
- 盛岡多佳(2001): 過食行動の最中に体験される意識の変容に関する研究 心理臨床学研究, 19(2),
160 - 170
- 李 敏子(1989): 他者へのメッセージとしての自己破壊 心理臨床学研究, 6(2), 19 - 28
- 下坂幸三(1999): 拒食と過食の心理 岩波書店
- 鈴木陸夫(1997): TATの世界—物語世界の実際 誠信書房
- 徳田完二(1981): Anorexia Nervosaに関する一研究 —描画テストを用いて 京都大学大学院教育学
研究科修士論文(未公刊)
- 坪内順子(1984): TATアナリシス—生きた人格診断 垣内出版

(博士後期課程3回生, 心理臨床学・臨床心理実践学講座)

(受稿2004年9月9日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

The Inner World of Clients with Eating Disorder — From the View Point of “Protection” in the TAT card 19 —

FUJIMOTO Makiko

The prior studies reported that clients of eating disorder protect themselves by eating disorder. So, this paper examined the TAT card 19 from the view point of “protection” to investigate how the danger in which clients with eating disorder need to protect themselves is, and if clients with eating disorder have a sense of protection or not. It is supposed that a sense of danger is projected on The TAT card 19, and “house or ship” in the TAT card 19 is often seen as the image of their protection. The results showed that the control group tended to make “being protected” “stories in contrasting” “house or ship” with the dangerous outside world. From this result, the function of protection in the group of clients with eating disorder is supposed to be weak. And the group of clients with eating disorder created “being unprotected” stories without the comments of “house or ship” more often than the control group. It is discussed that the group of clients with eating disorder have difficulty to hold the “being protected” image. A few cases are more examined. It is assumed that clients with eating disorder is hard to have the trust in self or the center of self which is supposed to be projected to the inner of “house or ship”, and that what clients with eating disorder want to protect is vagueness.